

# 史遊会通信

NO. 200  
平成23年  
7月17日  
発行

事務局  
☎  
03--3712  
0651  
下山田方

六月講演余聞

## 戊辰の激動に翻弄された輪王寺宮公現法親王

千坂 精一

朝廷に大政奉還して將軍職を辞した十五代將軍徳川慶喜が江戸城を出て上野寛永寺に参拝したあと大慈院に入って蟄居したとき、この東叡山を管領していたのは二十二歳の輪王寺宮公現法親王であった。

輪王寺宮というのは明暦元年(一六五五)寛永寺にいた後水尾帝の第三皇子守澄法親王に賜った称号である。

公現法親王は、弘化四年(一八四七)二月十六日伏見宮邦家親王の第八子に生まれた。二歳のとき仁孝帝の猶子になっているから昨年即位した明治帝の叔父に当たると安政五年(一八五八)十二歳になったとき勅命により輪王寺宮の弟子に任ぜられた。

十八歳になった元治元年(一八六四)十二月、親王の位の第一等を授けられ、天台宗の寺の中心比叡、東叡、日光の三山を管領することになった。

武家の棟梁が大政奉還し將軍職を辞任しているのに、朝廷は有栖川宮熾仁親王を東征大総督に任じて錦旗二旒を与え、兵を率いて京を進発させた。

幕府は恭順している慶喜が蒙った朝敵の汚名を雪ぐべく、前將軍家茂に降嫁した和宮に縋って征討取り止めを嘆願してもらったが、降嫁まえまで和宮の婚約者であった有栖川宮は承服しなかった。あと皇族の血筋といえ、輪王寺宮だけ

### 例会のお知らせ

#### ◎ 7月例会

日時 平成23年7月29日(金)

午後6時~8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第3研修室

講演 招待講師・山田嘉久氏

テーマ 「司馬遼太郎の世界」

自由執筆 千坂精一・平山善之・

隆恵の諸氏

締切 8月15日

#### ▲ 7月は後期会費の納入月です。

#### ◎ 9月例会

日時 平成23年9月16日(金)

午後6時~8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第3研修室

講演 太田精一氏

テーマ 「幕臣たちの明治維新」

自由執筆 小田紘一郎・中込勝則・

村上邦治の諸氏

締切 9月末日(厳守)

であった。

徳川家一門の田安・一橋・清水の御三卿が寛永寺に赴き懇願したが、輪王寺宮は素っ気なく拒絶した。

これまで将軍家は墓所である寛永寺に礼を尽くしてきていたのに、慶喜は水戸の出であるためか軽んじている。

慶喜の父徳川齊昭は廃仏令を布いて多くの寺院を破却し、僧侶を追放した。

慶喜にもその傾向があるのだろうと不信感を抱き、心よく思っていなかったのだ。

しかし宮は、朝廷軍が江戸に侵攻すれば多くの町民たちが戦火に巻き込まれて犠牲になるだろうことを憂慮した。

慶喜の恭順が確認されれば朝廷軍は名分を表い、江戸侵攻ができなくなる。

(朝廷に慶喜の謝罪を認めさせれば、江戸を救うことができる)

宮は京へ行くことを決断した。

「朝廷へ慶喜の謝罪恭順を伝えて、(赦免)の寛大な処置を願う」

宮は、二月二十一日に京へ出発した。

途中駿府(静岡市)で朝廷の東征軍と出会った宮は、駿府城で有栖川宮大総督と公卿参謀正親町公重と会見した。

有栖川宮は、

「慶喜の朝廷に対する叛逆は明白である。

その大罪に追討の勅命が発せられて兵を江戸へ向けている。いま頃になって助命嘆願してもどうにもならない」

そう冷ややかに言うとき、

「上洛は愚かである。江戸に戻られよ」

それは有無を言わせぬ命令口調であった。宮は、有栖川宮の冷淡な態度が口惜しく

(この屈辱は生涯忘れまい)

と怒り心頭に発した。

三月十三日、西郷隆盛と勝海舟の会見で江戸開城の諒解がなり、討幕軍が江戸に入ると慶喜は水戸へ退去した。

旧幕臣たちで結成された彰義隊は、大慈院に蟄居している慶喜を護衛するために上野に屯集したのであるが、その慶喜が水戸へ去ってしまったことから将軍家の墓所寛

永寺を護ることになったので、それはつまり東叡山を管領する輪王寺宮を警固することであり、宮が彰義隊を指揮しているかの

ような格好になったが、宮は忠誠を誓う彰義隊と命運をともにしても悔いはないと思

うようになっていった。

彰義隊が敗れたとき、危険を感じた側近

たちは宮を安全な場所へ退避させるべく上野を脱出した。

落武者狩りから逃れるにはもはや近郷近在も危険で、品川沖に碇泊している幕府軍艦に乗るしかなく、鉄砲洲から舟で沖にいる(長鯨)に乗り移り、旗艦(開陽)に曳航されて遠く常陸の平潟へ逃避した。

そこから宮は陸路平、三春、會津を経て六月二十日に米澤入りし、二十九日に仙台の重臣片倉小十郎邦憲の白石城に移った。

そして、七月十二日の奥州越列藩会議に出席した。

宮はこのとき、薩摩を薩賊と非難し、幼帝(明治帝)を欺き公卿を嚇して幕府を威

圧させ、江戸の神社仏閣を破却したその暴挙に対して痛撃を与えよとの憤懣遣る方ない『令旨』を書いて伊達慶邦に授けた。

伊達慶邦は上杉齊憲に会って宮の『令旨』を提示した。両者はこの『令旨』は宮が盟

主就任を承諾しているのだと確認し合った。

その後の東北戦争はよく知られているとおりで、奥州二十五藩、越後六藩から成る

三十一藩の同盟は広範囲に散在していて、

せいぜい二、三藩しか連携できず戦力の逐次投入状態になり敗北してしまつた。

宮は磐城相馬と境を接している陸前巨理(宮城県巨理郡巨理町)にいる奥羽征討総督四條隆詞に『帰順書』を届けさせた。『帰順書』は受理され、宮は東征大総督府のおかれている東京へ送られることになった。

十日余りを要して千住まで辿り着いたとき、大総督府の使者がきて、「この地に留まり命令を待て」と告げた。

翌日、軍監がやってきて、「輪王寺宮、大儀を失いし廉により伏見宮預けとする。よって、ただちに京に赴き謹慎なざるべし」

そう言つて、これは朝廷の命であることを付け加えた。

そこには、有栖川宮熾仁親王の、(輪王寺宮の東京入りは断じて許さぬ)強固な意思が感じられた。

十一月四日、軍監と数十名の兵士が宮の駕籠の前後を固めて千住を出発した。

蹴上から京へ入り、伏見宮邸へ着いたのは十九日の九ツ(零時)であった。

ふつう江戸から京までは二十日以上かかるが、十五日間で到着したのだから早い。

母屋から離れて孤立した小さな家が宮に宛てがわれた謹慎所であった。

宮が到着したことはわかつてはいるはずなのに、父はともかくとして家令すらも顔を見せなかった。

慶喜の助命嘆願はまだいいとしても、上野東叡山寛永寺に籠もって彰義隊と行動をともにしたことや、奥羽越列藩同盟の盟主として反抗の構えを示したことは朝敵の行為にほかならなかった。

皇族でありながら獅子身中の虫になった子の親として申し訳が立たぬ父の苦悩を思うと、宮はいても立ってもいられず、ひたすら謹慎をつづけた。

一年ほど経った十月のはじめ、めずらしく家令がやってきて、「屋敷のほうへお出で下さるよう」

伝えられて、はじめて謹慎所を出た。

座敷には、隠居して剃髪仏門に入り、禪樂親王となった父が待っていて、朝廷から『御沙汰書』が届けられたことを告げ、「謹慎を解き、伏見宮に復帰し、廩米三百石を賜う」

旨を読み上げた。

朝敵輪王寺宮公現法親王から懐かしい伏

見宮能久親王に戻ることができたのである。

宮は眼から涙が溢れて嗚咽を抑え切れず、顔を上げることができなかった。

翌年、すぐ上の兄東伏見宮嘉彰親王から東京へくるようにすすめられて、東伏見宮邸に寄宿した。

兄宮は、戊辰戦争の軍事総督になった仁和寺宮で、小松宮を経て東伏見宮になった。

その後、嘉彰親王は戊辰戦争の功績によりイギリス留学を許可されて出発したので、宮は兵部卿有栖川宮邸に移ることになった。

いちどは朝敵となった宮を赦さずというのか、あるいは行き過ぎた行為を悔いて傍におけば汚名も消えると考えてのことか、いずれにしても有栖川宮の意向であろうが、たとえ好意であろうとも宮にとっては針の筵であった。

宮は有栖川宮邸から脱出するため遊学を志し、太政官からドイツ留学が許可された。

宮はドイツ陸軍大学を卒業して帰国すると弟の北白川宮家を継いで陸軍中将にまですすみ、兄小松宮が有栖川宮死後の参謀総長に就任したとき近衛師団長になったが、

台湾島民の叛乱鎮圧に遠征中瘡に罹り、その地で四十九年の波乱の生涯を閉じた。

自由執筆

## 皇女和宮「替え玉説」考

(友の会) 諸橋 奏

和宮は弘化三年(一八四六)仁孝天皇の第八皇女として誕生、孝明天皇の妹である。嘉永四年(一八五一)、有栖川宮熾仁親王と婚約。

幕末の外圧下、朝・幕分裂の打開策「公武合体」の具体化として、文久二年(一八六二)十四代將軍徳川家茂に降嫁した。慶応二年(一八六六)家茂が大坂で病没後は、静寛院宮と号し、江戸城の無抵抗開城はじめ、国の大事に尽力した。政略の犠牲になつた悲劇の女性と評されたが、その結婚生活は短かつたものの仲睦まじかつたという。明治十年(一八七七)箱根塔ノ沢「元湯」(現環翠楼)で病没。三十二歳であつた。死後、その数奇な運命から様々な風説がながれた。「遺骨改葬の折、左手首の骨が見当たらなかつた」「毛髪の色が異つていた」「副葬品は温板写真とおぼしきガラス板の他はなにもなかつた」「箱根山中自殺説」など喧喧諤諤。極め付けは有吉佐和子

著の小説『和宮様御留』。「あとがき」に高田村名主新倉家婦人による伝承話として、「和宮様は私の家の歳で縊死なすつたのです。御身代りに立ったのは私の大伯母でした。増上寺のお墓に納っているのは和宮様ではありません。(中略)板橋本陣で入れかわつたのです」と書いている。

和宮の江戸下向は、文久元年十月二十日京都出発、中山道を二十五日間の日程で十一月十五日江戸着、九段清水邸に入られた。問題の替え玉説、中山道最後の板橋宿についてみると、本陣は中宿飯田新左衛門家、脇本陣は中宿飯田宇兵衛家、平尾宿豊田市右衛門家、上宿板橋市左衛門家が夫々勤めていた。

和宮下向の折は、江戸入府前日の文久元年十一月十四日、和宮の行列は縁切榎を避け、回り道をして中宿脇本陣に入った。本陣「飯田新左衛門家」と中宿脇本陣「飯田宇兵衛家」は本家と分家の関係にあり、この時は由あつて、一晚を中宿脇本陣を本陣と見立てて過ごしたのであつた。「和宮替え玉説」の「板橋本陣で入れかわつたのです」について知己の当宇兵衛家に問うたところ、一笑に付された。

平成十五年九月二日付け朝日新聞「秘中の秘」欄に、歴史学者氏家幹人氏が「明治四十一年、麹町坂川牛乳店(明治三年東京最初の牛乳搾乳業)番頭から聴取」の大奥に奉公していた老女の話載せている。

將軍家茂が江戸城で初めて和宮様と対面されたとき、家茂はびっくり仰天された。宮様は万事「京都市」で、お顔に剃刀を当てたことがなく、「毛むくじやら」に見えたから……氏家氏は「鳥肌が立つほど面白い秘話」と言っている。

ところで、司馬遼太郎の『峠』には長岡藩家老河井継之助の最後に立会つた寅太、後に阪神電鉄を設立した外山脩造の話がしばしば出てくるが、その外山家には次のようなエピソードがある。

越州古志郡上北谷村大字小貫(現長岡市)の外山家の祖先は京都の「日野氏」である。とされ、寅太は十三代。現代に生きた十七代貞(大正七年生れ、平成十六年没。主人は戦争で早逝、十七代を継ぐ)は日野家の京都風を継承し、嫁すまで「毛深い娘」で過ごしていたという。とするとこの老女の話は信憑性が高く、「替え玉」説は無理な物語っている。

自由執筆

生死をわかつ十五段

森下 征二

早いもので、東日本大震災の発生から三ヶ月余りが過ぎた。犠牲者の数は行方不明者を含め、二万三千名を超すと言われている。しかも、未だに被害の全貌を掴むことすら出来ない。

折もおり、五月二十三日付の読売新聞の人生案内欄に、「祖母置き逃げた自分を呪う」という衝撃的な見出しの投稿が掲載された。

大学生の女子。何をしていてもあのことばかりを思い出してしまいます。

あの日、私は祖母と一緒に逃げました。でも祖母は坂道の途中で、「これ以上走れない」と言って座り込みました。私は祖母を背負おうとしましたが、祖母は頑として私の背中に乗ろうとせず、怒りながら私に「行け、行け」と言いました。私は祖母に謝りながら一人で逃げました。

祖母は三日後、別れた場所からずっと離

れたところで、遺体で見えられました。気があつて優しい祖母は私の憧れでした。でもその最期は、体育館で魚市場の魚のように転がされ、人間としての尊厳などどこにもない姿だったのです。

助けられたはずの祖母を見殺しにし、自分だけ逃げてしまった。そんな自分を一生呪つて生きていくしかないのでしょうか。どうすれば償えますか。毎日とても苦しく涙が出ます。助けて下さい。(A子)

助けて下さい……。A子さんの悲痛な声が私の胸をかき乱す。おそらくこれは、東北の太平洋岸を壊滅させた津波が起こした被害の一つだろう。

私は新聞を持つ手を休め、テレビが何度も中継した津波の破壊力を思い出した。荒波が怒涛となつて陸地へ駆け上がり、家も車も植栽も一瞬にして呑み込んで行く。あの凄まじい力を思えば、一体誰が彼女を責めることができるだろうか？ 私は再び新聞を手にして、海原純子(心療内科医)さんの回答に目を走らせた。

お手紙を読みながら涙が止まらなくなり

ました。こんなに重い苦しみの中で、どんなにづらい毎日かと思うとたまりません。ただ、あなたは祖母を見殺しにしたと思つていらつしゃいますが、私には、そうとは思えません。

おばあさまは、ご自分の意志であなただけで行かせたのです。一緒に逃げたら、二人とも助からないかもしれない、でも、あなた一人なら絶対に助かる。そう判断したからこそ、あなたの背中に乗ることを、頑として拒否したのでしょう。おばあさまは瞬時の判断力をお持ちでした。その判断力は正しく、あなたは生き抜いた。おばあさまの意志の反映です……

……おばあさまの素晴らしさは、あなたの中に受け継がれていることを忘れないで下さい。

流石は心療内科の医師である。読者の想いを見事に代弁されている。どうか自分を責めないでほしい、強く生きてほしいというのが大方の願いであろう。しかし、それと同時に、読者の多くは自分の胸に鋭く突き刺す、棘のようなものを感じておられるのではなからうか？

もしも、自分がA子さんの祖母の立場に立ったらどうするか？ 将来ある孫の命を全うさせるため、力尽きた自分の命を深く見限ることができるのか？ 私自身はと言え、幾ら考えてもわからない。全く確信が持てないのだ。

実は、二百年前にも同じようなことがあった。

天明三年、浅間山が大噴火し、日本のポソペイと呼ばれた鎌原（かんばら）村が、火砕流に呑み込まれた。村の高みの観音堂に逃げ登った僅かな人だけ生き残った。観音堂の石段は五十段、上部の十五段を地表に残し、残りは全て埋まった。上から数えて十五段、登った者は生き残り、登りきれなかった者は火砕流に沈んだのである。

昭和五十四年、石段の最下部から、若い娘と、娘に背負われた母親らしい二人の遺体が発掘された。平成の祖母の判断が、適切だった証左だろうか？

天明の生死をわかつ十五段

何時の日か、この句碑が立つ観音堂を訪ねてみたいと思っている。

### 自由執筆

大災害に寄せる「サンフラン・ミュージアム」のこと

高橋 由貴彦

この度の三・一一大災害で石巻市は町の大半を失った。私の生まれは石巻で、三歳迄しか住んでいなかったが、三つ子の魂百までといわれるとおり、故郷の荒廃は悲しい。

町の外れの渡波わたのはに、「サンフラン・パウチスタ・ミュージアム」がある。

海に面した高台を利用した帆船美術館で、例の支倉常長使節をローマに運んだ復元船を中心に展示された今ふうなアミューズメント美術館ではあるが、石巻市のシンボルにもなっている。

十数年前に建設されたが、開設当時から私も少しながら関わり、開館時には三ヶ月間の長きに、私の「ローマへの長き旅」と題した写真展をここで開かせていただいた。

昨年末、濱田直嗣館長から来年から数年間「支倉出航四百年祭」をやるから、ぜひ協力してくれと頼まれていたので、気にな

っていたが、ながらく電話は通じなかった。しばらくしての災害後の連絡で「幸い船は船尾の傷だけですんだが、一階の海に面した主展示場は全滅でした」と落胆の声が電話から伝わってきた。

今は文化より生活優先とのことで災害者救援に全館あげて協力され、しばらくは災害救助所に提供されているとのことであった。

ところがさらにさきの津波ではほぼ無傷の船に不幸が及んだ。四月二十九日の嵐で、前壁（フォアマスト）が根元から折れ、主壁の上のトップマストが見張り台（メイン・トップカースル）を残して落下したのだ。やはり大津波は、この船にも隠れた被害をもたらしていたのだろうか。

丁度今から四百年前。スペインの航海者セバスチャン・ビスカイノが金銀島探検のために日本に來航した。その際の伊達政宗との知遇で、東北の海岸線を測量したが、気仙沼の越喜來浜で四メートルの大津波に会い、そのうえ数ヶ月後に宮城県沖と思われる地点で台風に遭遇して主壁（メインマスト）が折れ、荷物をすべて失うような遭

難で、ほうほうの体で浦河に逃げのびたことがあった。

村上直次郎訳のその部分を引いてみよう。

『金曜日(一六一一年、二月二日)我らは越喜来の村に着きたり。また一つの入り江を有すれども用をなさず。ここに着くまゝ住民は男も女も村を捨てて山に逃げゆくを見たり。これまでは他の村々においては住民われらを見んため海岸に出でしが故に、我らはこれを異とし、我らより逃れんとするものと考え、待つべしと呼びしが、たちまちその原因はここにおいて一時間継続せし地震のため海水は一ピカ(三メートル八九センチ)余の高さをなしてその境をこえ、異常なる力をもって流出し、村を浸し家および藁の山は水上を流れ、はなはだしき混乱を生じたり。海水はこの間三回進退し、住民はその財産を救うあたわず、また多数の人命を失えたり。この海岸の水難により多数の人溺死し、財産を失いたるは後に述べべし。このことは午後五時に起こりしが我らはその時海上にありて激動を感じん、また波濤会流して我らは海中に吞まるべしと考へたり。我らに追隨せし舟二艘は沖にて海波に襲われ沈没せり。神陛下は我らを

この難より救いたまいしが、事終わりて我らが村に着き免れたる家において厚遇を受けたり(以上後述書 一一〇〜一一一P)』

『九月十四日(一六一二年)東北風による暴風雨起こり、二十四時間継続し、我らは沈没すべしと考へしが、物品を海に投じて免れたり。我らの航海を續けて九月十八日にいたりしが、台風起こり、北東の風を持つて始まり、磁石の各方向に転じて、我らの船は甚だ小なりしが故に、半ば難破浸水し、動揺甚だしく波浪高く、船は老朽なりしをもつて、木材の破壊せしがとき音をなし、前甲板の下破損せり。我らは大塙を断ち、各甲板上に在りし物はことごとく海に投じたり。五ヶ所に大綱施せしが、最初の波にて沈没するの外なきことを予期し、乗組員は非常なる労働をなし、失望困惑せり。司令官は己の所持品をもつて彼等を歓待奨励せしが、このような困難の際に、救助を与え賜う神の御慈悲と聖母のご加護により、天候は回復せり。ただし波浪は十一日間引き続き甚だ高く、船倉を開き食料や水を出す事あたわず。乗組員は飢渴のため死せんとし、また厨師は海に投じたれば、食物を調理する事あたわず。』

この状態にて新イスパニア(メキシコ)にむけ航海をすること不可能なりたれば、会議を開きてとるべき処置を協議して、再び日本にいたりて皇帝より必要なる資金を借受、明年航海する準備をなす事は陛下も許したもうべしと決議せり。(以上異国叢書ビスカイノ金銀島探検報告書・一五〇〜一五一P 駿南社昭和四年)』

それらが起因となつて伊達船のサンファン・パウチスタが誕生するわけだが、偶然とはいへ歴史の不思議さを感じずにはおられない。余りにも今回の大災害に似すぎると思われることに驚く他ない。

幸い「サンファン・パウチスタ・ミュージアム」はこの秋を目指して再開予定だ。

私の手元にかつての「ローマへの長き旅」の写真保管品があるが、四つの木箱に納めて倉庫に保管している。それをこの度全部同館に寄贈しようと思つている。一メートル四方大以上に伸ばした百枚近いモノクロの写真作品集だが、少しでもこの際、恩返しが出来ればとも思つている次第である。

自由執筆

和算の活用

佐藤 健一

近頃、和算はメディアでもよく取り上げられるようになった。とは言っても和算の中ではさして重要とは思えない算額に興味があるらしい。

小学館から依頼があったので、担当者に和算について詳しく説明したが、暫くしてから会うことになった。先方の質問に応じたのであるが、算額のことが一番多かった。奉納場所、算額の形と大きさ、問題や図の配置、奉納する人のこと。これらはいつものことである。終に彼は和算には「病題」というものがあるそうだが、どんな問題か、という。一口に病題と言っても何種類もあるし、和算の時代では、現実に合わないのが病題となっているけれども、現代の数学では何の問題も起こらない普通の問題になる場合もある、と答えた。どうもこれでは理解してもらえない。いくつかの例を挙げて説明し、なんとなくわかったようだった。三月の中旬に小学館からコミック誌が送られてきた。先日の話が「和算に恋した少女」となってまとめられていた。コミック

だったのか、と思って中を読むと「病題」は話の鍵になっていた。

同じ頃、ある映画会社から、今度制作する映画の和算の部分について見てほしいと依頼があり、昨年本屋大賞の小説を扱うという。珠算の人たちからの推薦によるらしい。断り難い人だったこともあって承諾した。暫くすると脚本が送られてきて、内容を検討してほしい、とあった。一字一字丁寧に読んでみると、明らかな間違いが多すぎる。この本が書かれていた途中に出版社の編集の人が訪ねてきて最初の数十頁を見せてもらった。その折にもあり得ないことが書かれていたので、その違いを指摘し、参考になる文献を知らせたことがあった。数年して刊行したと、編集の人が本を持参して「著者からもよろしくとのことです」と本を頂いていた。その時は途中までしか読んでいなかったが、今度は全文を読んでみた。やっぱり原作も間違いだらけである。映画では嘘は直す必要があると言う。病題としてあるものも直すことになった。かなり大切なところで病題があつて、これが問題にならない問題なのである。監督からこのような問題を考えた精神を汲んで問題を直してほしいとのこと、図はそのままに

近い形で手直した。しかし、問題文に「今有如図…」としたため、厳密に言うとは病題にはならない。「如図」を取ってしまえば病題になる。そうすると図のない算額になり、よくない。この作業をやったいくうちに病題という語をまき散らしたのはこの本であると思うようになった。

## 事務局だより

※九州大学名誉教授合山究先生より「史遊会通信第9集」のお礼状をいただきました。……いつもながら多士済々、古代から現代に至るこの世に起こった万般の歴史事件や文化事象を、研究論文ふうの冷たい書き方ではなく、まるで当事者であったかの如く、あたたかい筆致で生き生きと写し出されておられ、視野の拡がり、柔軟性の増大などに寄与することも多く、いつもいつも人間社会のありようや人間を見る目も一変するような新鮮な刺激を受けております。取り急ぎ一言御礼申し上げます。

## ※会員の活動

講演「源氏物語と今」小田紘一郎氏  
8月6日(土)午前十時半  
目黒区総合庁舎2階大会議室  
申込み〓不要 参加費〓無料